

結 章

楽園とパラドクスの人類学



本章をもって本研究は議論を閉じる。第1節では、楽園観光とパラドクスの人類学的研究を主題とした本研究が論及しておくべきある先行研究について、短い考察を行う。第2節では、あらためて序章以降の議論のポイントを整理・確認し、議論を締めくくる。

第1節 楽園パラドクス再考

ここまで、序章であらかじめ示した方向性に沿って、5つのトピックを順次取り上げてきた。それらの総括を行う前に、本研究の主題設定に関連して論及し整理しておくべきひとつのトピックがある。それは、労働経済論の立場からの「楽園パラドクス」をめぐる先行研究である。序言で「周縁楽園観光論パラドクス編」と自己規定したように、本研究は現代の周縁的な楽園観光の諸形態に焦点を当てた人類学的パラドクス論の試みであり、当該議論と本研究とは依って立つ理論的・方法的枠組みもかなり異なる。しかし、楽園とパラドクスの研究という点で共通点をもつ以上、たとえば当該議論がややトリヴィアルなものであったとしても¹、そのポイントを確認しておくことには一定の意義があるであろう。

以下、本節では、言説空間の次元にある——といっても、社会空間にあることに変わりがないが——この「楽園パラドクス」をめぐるパラドクスについて取り上げる。

*

ここでいう「楽園パラドクス」(The Paradise Paradox)は、1990年代に刊行されたローマ・クラブの報告書『雇用のジレンマと労働の未来』の中の1ページにも満たない小コラム——「論議すべきポイント」(Points of Controversy)10番目のコラム「楽園パラドクス」——において示された論点である(Giarini & Liedtke 1996: 85; cf. Giarini 1980)。

まず、ジアリーニとリートケの議論をできるだけ正確に要約しておこう。

彼らによれば、楽園は人々が無尽蔵の資源に支えられ幸福に生きる場所であると定義される。ここでは、労働も生産も不要であり、およそ経済活動として理解されるものが存在せず、賃金支払いも失業もない。さて、産業技術の進展は、こうした楽園に近い状態をもたらしつつある。その一例は、生産性の向上による商品価格の下落に見られる。ただし、それが産業全体におよぶとすれば、雇用ゼロ、貨幣使用ゼロの状態をもたらすことになる。とすれば、楽園に向かう道のりは、地獄に向かう道りとおなじもののように見えはじめる。地獄とは、あらゆる想定外事態の必然的な終着点である。これは、合理的に見えるものは不合理な状況をもたらすという、ということの一例である。

いささかわかりにくいだが、以上が彼らの「楽園パラドクス」の説明である。こうしたジアリーニらの議論に刺激を受けて、経済学者の田中や科学哲学者の広井らがそれぞれ自身の観点から議論を

¹ 当該議論を所収した『雇用のジレンマと労働の未来』の巻末索引には、「楽園パラドクス」の事項がない。このことは、この議論が同書においてさほど重要な位置づけをもっていないことを示唆している。

しており、それについてはすぐあとに批判的に見ていくことにする。また、ジアリーニらの議論の後半部分——楽園に向かう道のりは…以下の部分——は説明不足の感は否めず、これについては若干の補足も必要であろう。ただ、その前に確認しておくべき点がある。それは、ジアリーニらの楽園の定義が決して一般的であるとはいえないという点である。楽園を、人々が無尽蔵の資源に支えられ幸福に生きる場所であるとする定義は、近代経済論・資源論の観点にあまりに偏っていないだろうか。ユダヤ・キリスト教・イスラーム的世界観におけるエデンの園は、すくなくとも聖書や「クルアーン」に照らすならば、そうした資源論の観点から主題化されるべきものではない。そして人間の幸福も、無尽蔵な資源に還元されて捉えられるべきものではない。ジアリーニらの議論は、自分たちが生きる近代西欧社会の内部にある社会経済構造の把握図式を、近代のはるか以前に形成された楽園をめぐる言説や表象に当てはめ理解しようとするバイアスを伴った理解枠組みの上にある。また、世界の諸社会の現場の状況に関する具体的観察を欠く机上の議論ではないか、とも私は考える。ただし、そこで主題化されているのは紛れもなくひとつのパラドクスではある。きわめて合理的で望ましい状況つまり楽園状態が、同時に不合理でおよそ望ましくない状況つまり地獄でもありうるという事態が、このコラムの「論議すべきポイント」であるからである。

しかし、田中や広井は、ジアリーニらがいかなるパラドクスを主題化しようとしたのかというもっとも基盤の論点については取り上げず、ジアリーニらのいう楽園パラドクスを、いささか論点をずらせたかたちで自らの議論の中に組み込んでいる。順に見ていこう。

田中は、社会の生産性・効率性の向上が、豊かな生活や自由時間の享受だけでなく、長時間労働やストレスの増加、失業者や貧困をももたらすというアンビヴァレントな現実に着目する議論の中で、ジアリーニらの「楽園パラドクス」に言及し、これを次のように要約する。われわれは生産性を上げて豊かな生活をする。つまり、ものが豊富で、苦勞して働かなくてもよい「楽園」に近づけるように、合理的選択を積み重ねてきたつもりだった。しかし、高い生産性の実現は、社会の人々みなに安定した職や収入をかならずしも保障してこなかった。むしろ、それ[高い生産性の実現]は、低賃金や失業の不安を生み、豊かな社会の中でその豊かさを手にすることができない人々を生み出すという矛盾をつくり出すことにつながっている。「われわれはよりよい社会のために合理的な行動をしたつもりで、かえって非合理的な状態に自分を追い込んでしまっているものであり、こうした状況を根本的に見直す必要があるのではないか」。田中は、これがジアリーニらの「楽園パラドクス」論であるとし、ローマ・クラブは、高い生産性と利益を実現する雇用労働が、他方でおおくの失業者・無業者と対になっている社会のあり方を見直し、社会全体として再配分していくことが必要であるという議論を展開した、と整理する（田中 2008: 38-39）。

こうした田中の議論は、ジアリーニらの議論を敷衍しているように見えるものの、そこからかなりずれた状況について論じたものといえる。ジアリーニらは、人々の総体が無尽蔵の資源に支えられ幸福に生きる状況を想定した上で、そこで実現された労働も生産も賃金支払いも失業もない「楽園」状態が、雇用ゼロ・貨幣使用ゼロの状態に帰着することをもって、これを楽園かつ地獄あるいは合理的かつ非合理的な状況といったパラドクスであるとみなした。つまり、ジアリーニらは、人々の間の格差を主題化することはなく、ある意味では素朴かつ単純に、こうした社会の到来が楽園でありながら同時に地獄の様相をも併せもつという点にパラドクスを看取したのである。一方、田中は、高い生産性の実現や豊かな社会の到来の中で格差が生み出され、一部の人々の低賃金や失業の不安を生むという点に矛盾の創出を看取している。しかし、ジアリーニらは、「楽園に近い状態」の「一例」を「生産性の向上による商品価格の下落」に見た上で「それが産業全体におよぶとすれば、雇用ゼロ、貨幣使用ゼロの状態をもたらす」としたのであって、田中が語る状況は、ジ

リーニらがいう「産業全体におよぶ」状況とは明らかに異なる。むしろ、それは、ジアリーニらの想定する状況にいたる前の中間ないし過渡期の段階に当たる。しかも、田中が語る「非合理的な状態」は、近代の資本主義的社会・経済の合理化が実質的に回転しはじめた当初からすでに観察されたものと考えられる。とすれば、やはり、それは、ジアリーニらが「楽園」と呼ぶ状況とは別ものであると考える方が妥当である。田中が見出した「矛盾」は、幸福な楽園状態ははらむパラドクスというよりも、資本主義社会が抱える矛盾である。田中は、マルクスやヴェーバーが論じた近代社会が抱える矛盾や非合理性を主題化しているにすぎず、ジアリーニらが論じた楽園パラドクスそのものに考察を加えているとはいえない。

さて、広井もまた、自身の議論の中で「楽園パラドクス」に論及する。私が確認できたのは2つの論考であり、ひとつは「グリーンな福祉国家は可能か」というタイトルで開催された計3名のパネリストによるシンポジウムおよびそれをまとめた報告書、もうひとつは現代の社会保障と福祉国家のあり方について論じた「「グリーンな福祉国家」は可能か」という同様のタイトルの単著エッセイである。いずれにおいても、「楽園パラドクス」は、1980年代以降とりわけリーマンショック以降に若年層の高い失業率が日本のみならず先進国において慢性化しているという点を取り上げ、その背景や構造に触れる議論の文脈において論及されている。現代においては、かつてのように雇用の総量が拡大をつづけるという前提はもはや成り立たなくなっている。いまや雇用に関しては、ある種の「椅子取りゲーム」のような状況が生じている。そうした中で失業の不安に駆られて働けば働くほど、その労働者は疲弊する。同時に、他方では、それが生産過剰を増幅させることになる——また、広井は論及していないが、雇用の拡大が見込めない中では、その過剰な労働意欲が他の労働者に割り当てられるはずの労働力を食ってしまうことにもなるであろう——ために、失業率は上がる、という皮肉な悪循環に陥る。こうして、「過労」と「失業」とが並存するという矛盾した事態となる²。広井は、こうした論点に呼応するのが、ジアリーニらの「楽園パラドクス」論であるとする（広井・山口・宮本 2010: 14-15; 広井 2011: 35）。広井によれば、「生産性が非常に高度になれば、少ない労働ですべての人の需要が満たされてしまうので、多くの人が失業してしまうことになる」。それは、一見すれば、非常に奇妙にも思えるが、理屈としては確かにその通りであって、まさにパラドクスである。広井は「楽園パラドクス」をこのように整理する（広井・山口・宮本 2010: 14-15）。

しかし、若年層の失業率の高止まりや「椅子取りゲーム」状況、あるいは「少ない労働ですべての人の需要が満たされてしまうので、多くの人が失業してしまう」状況は、果たしてジアリーニらのいう「楽園」状態と近似する事態であろうか。否といわざるをえない。みなが働かなくても楽に生きていけるのが、彼らの定義する「楽園」なのであって、広井もまた田中と同様に、彼らの楽園概念をそのまま受け止めてはいない。田中の議論を検討した箇所ですべてのように、ジアリーニらは万人が幸福に生きると同時に、万人が労働・生産・雇用・失業から解き放たれた状況を理念的に設定した上で、それを楽園でもありかつ地獄でもあるとしたのであって、おおくの失業者が出る状況や若年層に失業のしわ寄せが行く状況は、ジアリーニらのいう「楽園」の指標たる雇用ゼロ状態

² 広井や田中は、雇用や賃金労働のあるなしが比較的明確に分かれる日本や欧米のような産業・労働形態を念頭において「楽園」のパラドクスを論じている。しかし、インフォーマルな産業経済セクターが広く社会を覆っていて、就労状態と失業状態との間に明確な境界線を引いて捉えられない状況に生きる人々の方が、現代世界ではむしろ多数派を構成しているはずである（森田 2021; cf. バナジー & デュフロ 2012(2011)）。すくなくとも、豊かな社会の中でその豊かさを手中に収められない多数の人々が存在することを「矛盾」と即断する視点には、ある種の自文化中心主義が内在しているように思われる。

には合致しない。多数の（若年の）失業者と少数の被雇用者——また、そこに多数の失業者とごく少数の雇用者つまり経営者や資本家という構図を差し挟んでもよいであろう——との分岐に着目する広井の理解もまた、ジアリーニらの主張をそのまま敷衍したものとはいえない。

このように、田中や広井の議論は、ジアリーニとリートケの主張を正確に捉えたものではないといえる³。では、後者は、いかなる意味で楽園と地獄がおなじようなものであるとし、そこにパラドクスを看取したのであるか。私は、次のように考える。労働から解放された社会は、労働で得られる収入を消費や貯蓄など何らかの用途へと転じるチャンスがない社会でもある。無尽蔵の資源が与えられ何不自由なく万人が生きる状況は、その点で、働くことの生きがいもなければ、消費によるストレス発散もなく、資産がすこしずつ増えることに満足を感じたり、過去と比べてゆとりを実感したりする機会もなく、変化やアクシデントがない、いわばおなじ色合いとトーンの真っ平らな生を、みなが等しく生きる状況ということになる。これが「楽園」のもうひとつの様相ないし実相である。では、そうした通時的にも共時的にもかわり映えのしない同等・平等な人生を送ることは、果たして幸福と思えるのであろうか。むしろ、それはつまらないものではないだろうか。彼らがコラムの後半で、おそらく紙幅の関係から圧縮して論及しようとしたパラドクスは、こうした点を主旨とするものであったと考えられる。

もっとも、以上は、近代の社会経済構造の内部に係留された理解枠組みにもとづく解釈である、という点には注意を払っておくべきである。むしろ、私は、そのような桎梏を解き放ったところで、次のように敷衍し再定式化しておきたい。人は失敗もすれば過ちも犯す。甘い経験もあれば酸っぱい経験もある。さらに、いつどのように自身の生が終わるのかもわからない。そうした、ときに不幸とを感じる契機も盛り込まれている、抑揚や変化を伴う生をそれぞれが多様なかたちで、また幸せな生が送れるという確実な保証や担保がないままに、ときには苦しみつつも日々を生きること、そしてそれをたがいにあれこれ語り合ったり受け止め合ったりする喜怒哀楽の過程にこそ、生きることの醍醐味つまりは厚みのある豊かな生があるのではないか。ジアリーニらは、こうして、楽園に向かう道のりは、視点を変えてみるならば、地獄に向かう道のりとおなじようにも見えるのではないか、とくに想定外の事態に出くわした場合は楽園の中にも地獄の様相が見えるのではないか、合理的に見えるものの中にも不合理なものはあるのではないか、理想の楽園が地獄でもあるというパラドクスは、そうした合理的なものや理想的なものが裏腹にもつ非合理性や反理想性といったものを具体的に示す好例ではないか、と読者に問いかけたのではないだろうか。その論点は、価値観点によって合理性／非合理性は異なると喝破したヴェーバーの主張と共鳴するものでもある（第Ⅰ章第3節）。

重要なのは、ジアリーニらのこうした楽園パラドクス論が、真とも偽ともには判別できない主張である、ということである。このように考えれば、彼らは第Ⅰ章で論じた「逆理」としてのパラドクスについて真摯に考察していたのかもしれない、という類推も成り立つであろう。彼らは

3 田中や広井が楽園パラドクスについて論じた2010年前後と、本研究がおもに民族誌的な研究対象とした2020年代とおおきく異なる点として、AIの進化とそれが予期させる近未来の失業の増大可能性がある。柴田によれば、一定の知的作業を代行するAIは人間にしかできなかった仕事を根こそぎ奪うかもしれない、という確信的な恐怖が社会にはある。そのAIがもたらす失業については、楽観論と悲観論とがある。楽観論には2種類あり、いずれも人間が分業の輪から外れることに積極的な意味を見出す立場である。そのひとつは、ベーシック・インカムに目を向け、労働以外に従事する人間が労働以上の価値を見出しうるとする立場である。いまひとつは、労働者とAIをともに使役する立場、つまりは経営者や資本家の立場である。両者の立ち位置が対照的であることは、看過されてはならない。柴田は、アーレントにも言及し、「労働」という定式化以外の人間に営みに目を向けようとする（柴田 2023: 40-43; cf. アーレント 2025(2018/1998/1958); エリオット 2022(2018): 115, 336; Rifkin 1996: 20）。

社会経済重視の視点に立っているので、合理性／非合理性という論点に圧縮して表現したが、その要の点は、人間にとってもっとも幸せといえる状態が実現した場合にも、そこに幸せとは相容れないものがあるのではないかと、端的に言えば、楽園は即地獄でもあるのではないかと、ただ、これは真とも偽とも判断できないし、答えはなかなか見つからないのであろうが、といったかったのかもしれない。

ひるがえって、田中や広井は、首尾一貫した論理で議論を組み立てようとしたがゆえに、こうしたジアリーニらの「楽園パラドクス」に込められたパラドシカルな含意を素直に受け止めることができなかったように思われる。パラドクスについて考察するに際しては、パラドシカルな議論の構えを許容する視点が必要である。あるいは、ゲーデルやルーマンがそうであるように、当の理論的・方法的枠組み自体の中にパラドシカルな構えや仕掛けをあらかじめ引き込んでおく必要がある（第Ⅰ章）。田中や広井は、いずれも自身の議論枠組みの中では論理整合的で無矛盾な議論を志向したがゆえに、パラドシカルな構えを内包するジアリーニらの主張に論及するところで、その首尾一貫性に破綻が生じたのではないだろうか。パラドクスについてパラドクスを許さない立場から論じることが、ちょうど第Ⅱ章で検討した文化相対主義をめぐる先行研究——逆理を抱えた文化相対主義の当否や真偽について論理的に首尾一貫した説明をしようとする——とおなじように、妥当な議論や真なる命題を構成しえず、そこに逆理や逆説や矛盾をはらんでしまうのではないだろうか。むしろ、パラドシカルな構えを自らの中に意図的に導入した議論もまた、その議論をパラドシカルなものとしてしまうことには変わりはないのであるが。ともあれ、「楽園パラドクス」をめぐる先行研究の検討からは、パラドクスについて論じる議論が意図せず広い意味でのパラドシカルな議論を生産してしまうことがありうる、という点を確認することができる。本節のはじめに「楽園パラドクス」のパラドクスと呼んだのは、こうした事態である。

＊

以上、1990年代に提示されたローマ・クラブのレポートにある「楽園パラドクス」論とそれをめぐる田中と広井の議論を検討した。田中らは、近代社会経済論のパラダイムから、日本や先進国の社会をもっぱら念頭において「楽園パラドクス」について語った。本節では、そうした議論枠組みの可能性と限界に留意しつつ、ジアリーニらがその議論に込めたパラドクスの含意をあらためて抽出し再理解しようとした。それらの議論と本研究の議論とは、依って立つ理論的・方法的枠組みは異なる。本研究は、現代の楽園観光を主題とし、この現代社会において多様な生をそれぞれ生きる人々の、ときに厳しくもあり過酷でもある状況にも目を向ける民族誌的記述にもとづいた、ミクロかつボトムアップの視点からの把握を追究するものであった。そこでは、終末後の未来に設定された——そして太古の時代から人々を魅了した——いわゆる天国の楽園やそれに近いと想定された空間ではなく、現世に生きる人間空間にある楽園（のシミュラクル）と、そこへと／そこから移動したりそこに移住したりする人々の営みを、主題化した。

私は、仮に楽園パラドクスと呼べるものがあるとするならば、それはひとつのあり方に還元しては捉えられないものであり、時代により、社会により、個々人のもつ価値観により、採用する視点により、さまざまなものである、と考える。それゆえ、文脈に留意した具体的な民族誌的記述が議論に必須なのである。本研究の第Ⅲ章～第Ⅴ章は、2020年代という時代をともに生きている、ただそれぞれ異なる生き方をしている人々あるいは観光主体（ホスト、ゲスト、それらの周縁的諸存在）の諸行為と、その集合体たる観光諸現象を取り上げた、人類学的な楽園パラドクス論の具体の記述とその考察の試みであった。

第2節 本研究の議論の総括と整理

では、あらためて前章までの議論を総括することにしよう。

序言では、本研究が文化人類学的な民族誌的研究とその周辺諸学の理論的研究とを組み合わせ、現代観光を、とくに2020年代に焦点を当てて、その中心的な特徴や現象に着目する視座からではなく、周縁に着目する視座から捉えようとする試みであることを述べた。

序章では、まず第1節で人類学的な観光研究であることを標榜する意図をまとめたあと、第2節で楽園観光論から周縁観光論へという本研究の主題設定について明らかにした。観光を主題とした先行研究の大半は、観光の「中心」にいかなる特徴やメカニズムがあるのかを捉えようとする視座を基盤としてきた。そうした視座からは、現代観光の中核を構成する大衆観光に照準を合わせるアプローチが有効であろう。しかし、一方で、現代観光は、大衆観光とはまた異なるさまざまな形態を包含する多種多様性をも特徴とし、その裾野の拡大傾向にはますます拍車がかかっている。また、そこには、たがいに相反する特徴をもった観光形態が並存し、そうした異質性や独自性がさまざまな枝分かれした顧客の嗜好・志向を刺激しこれに呼応することで、観光という社会現象の総体の発展と多様化に寄与している、というメカニズムを看取しうる。とすれば、現代観光を、その中心ではなく、周縁や裾野に着目し捉えるアプローチは、一定の学術的意義をもつはずである。また、こうした視座からあらためて現代観光の主体を見渡せば、観光業を成功裏に営むホストや、観光というレジャーを思う存分楽しむゲストといった中心に位置する諸主体ばかりではなく、観光業にかならずしも十分携わることのできないホストやレジャー観光をかならずしも十分享受できないゲストといった周縁的な観光主体、さらには、そうしたホスト・ゲストとしての観光実践にほとんど関与できないいわば外縁に位置する諸主体が存在することが、視野に入ってくる。このような観光現象と観光主体の多様で拡散したあり方を、この裾野や周縁そして外縁に目配りしつつ、局所局所のあり方の記述と考察をひとつひとつ積み重ねながら、ある種の学問的ゲリラ戦を限定的に実行することは、試行するに値するものとなる。これが、周縁観光論という目論見であった。

本研究は、こうした目論見を『周縁観光論』と共有しつつも、これとは異なる方向に議論を展開しようとする、オルタナティブな周縁観光論を目指すものであった。それについては、序章第3節で論じた。そもそも「中心」と「周縁」とを明確に区別し概念規定することはできるのか。むしろ、視点によって中心と周縁は反転しうるとみなすべきではないか。『周縁観光論』では、周縁と中心との区別や両者の関係性を十分突き詰められてはいなかった。ただし、中心と周縁の論理的関係性を考究しようとするれば、パラドキシカルな、つまりは論理的に矛盾した表現や議論に陥ってしまう。しかし、私は、その一見したところの矛盾ないしパラドクスを、解消すべき難題としてではなく、むしろ正面から向かい合うべき主題として受け止め、これを生産的に論じうる議論枠組みを導入したいと考えた。こうして、『周縁観光論』とはまた異なる議論枠組みを起点に据えた、周縁観光論の新たな——といっても、もともとパラドクスには関心があったのであるが——展開をはかる冒険が、本研究の主題となった。

以上のような序章の問題設定を受けて、本研究は、さしあたり5つのトピックを検討対象に設定し、順次これらについて議論してきた。

第I章では、前著『周縁観光論』とは異なる本研究の理論的・方法的枠組み——それは人類学的パラドクス論と端的に呼ぶことができる——を明確にし、後続の民族誌的研究の基盤を整えようとした。さしあたり、われわれの生きる社会的現実のパラドクスに満ちたものであると捉えうる。では、そうした認識に立った上で、論理空間におけるパラドクスの探究とはまた異なるであろう、社

社会空間におけるパラドクスの探究を、いかなる議論枠組みから開始しうるのか。これが第Ⅰ章の主題であった。具体的には、本研究において使用する「パラドクス」概念を、狭義と広義の2つの次元で設定するとともに、後者の広義のパラドクスを、逆理（狭義のパラドクス）・逆説・矛盾などの諸概念——かならずしも相互排他的に明確に定義できない——のグラデーションを伴った重なりの中で捉えることにし、また哲学等が組み上げたパラドクス概念・パラドクス論をまずはブリコラージュ的に踏襲しつつ議論構築をはかっていく、という暫定的な画定を行った。そして、社会空間にある民族誌的事実を扱う人類学的パラドクス論の議論対象がきわめて広くまたさまざまであるという点を指摘し、それゆえ議論対象を適切に絞り込む必要があるということも確認した。本研究では、序章において現代観光の周縁的事象とくに周縁的な楽園観光の民族誌的事例に照準を当てるという主題設定を行っていたが、この作業は人類学的パラドクス論の出発において必要な手続きであったということになる。ともあれ、序章と第Ⅰ章とを合わせてまとめれば、本研究は、現代の周縁的な楽園観光の民族誌的事例のいくつかを標的としたゲリラ戦を行うことを通して、人類学的パラドクス論を出発させるという研究である。人類学的パラドクス論は、パラドクス論でもちいる道具立ての中にパラドクスがすでにつねに埋め込まれてあることを引き受けながら、暫定的に理論や方法を立て、研究対象を設定し、そのパラドクシカルなあり方を記述的に理解し、議論の構築に向けた取り組みをすこしずつ前進させようとする試みである。

さて、そうした現代の周縁的な楽園観光の事例の検討に向かう前段として、第Ⅱ章では人類学的研究一般の基盤にあるパラドクスについての検討を行った。第Ⅰ章でも触れたように、人類学的研究を含む学術的研究やその言説は、それ自体社会空間の中にあるひとつの社会的事実であり社会現象であり、そこにパラドクスが見出されることは何ら不思議なことではない。ただし、人類学やその周辺諸学においては、文化相対主義という主張や立場がパラドクスを内包しているという点はこれまで主題化されてこなかった。つまり、文化相対主義をひとつの認識基盤とする——すくなくとも文化相対主義を否定しない立場に立つ——人類学的研究は、自身の基盤にパラドクスがあるという問題を見逃したまま、あれこれの具体的な諸研究を、あたかもパラドクスなどない論理的に一貫した議論であるかのようにみなしつつ紡いできた、ということになる。そこで、本研究は、人類学的パラドクス論の事例研究の開始にあたって、まずは、本研究をも含めた人類学的研究一般に内在する、この文化相対主義のパラドクスを主題化することにした。

文化相対主義は、第Ⅰ章でいうところの狭義のパラドクスあるいは逆理を内包する点で、パラドクシカルな主張であり立場である。したがって、文化相対主義を擁護する、または文化相対主義を否定しない立場に立つ、人類学的研究は、その総体がパラドクシカルな構えをもっている。重要なのは、そのこと、つまりは文化相対主義が論理的に破綻した命題であることを、まずは正面から受け止めることである。第Ⅱ章は、人類学的パラドクス論の立場から、人類学的研究それ自体もパラドクスを抱えているということを論じるという、再帰的な関係性を組み込んだ議論の試みでもあった。そして、文化相対主義を論理空間において取り上げる議論をそろそろやめ、社会空間においてこれをあらためて主題化し、脱命題化した実践——その種の実践はこれまでもあったが、そこにパラドクスがあることを自覚しつつ取り組む——へとなすべき作業の軸足を移していくことが、今後の課題であると考えられることを指摘した。

第Ⅲ章では、21世紀に新たに出現した宇宙観光という観光形態を取り上げた。宇宙は、深海とともに、地上のほぼあらゆる場所を埋め尽くした観光の波が向かう残されたフロンティアのひとつである。加えて、まだ端緒についたばかりの宇宙観光は、地上の楽園に向かう初期の楽園観光の特徴に類似する特徴をもつ。こうした点で、21世紀にはじまった天空のフロンティアに向かう宇宙

観光を、20世紀に定着した遠方の地に向かう地上の楽園観光になぞらえて捉えることはできるよう思われる。また、宇宙観光は、最新のテクノロジーを導入した現代観光の最先端に位置するものであるとともに、ごく少数の富裕層のみが享受しうる観光商品にとどまるという点で、現代観光の周縁に位置するものと捉えることができる。第Ⅲ章では、こうした独特の特徴をもった宇宙観光に照準を合わせ、これを現代の周縁的な楽園観光のひとつの形態と捉え、検討することにした。

そこで明らかになったのは、現代の先端的技術の粋を結集した宇宙観光は、視覚と触覚を中心としたアナログな知覚体験を観光者が味わうという、19世紀以来の観光のプロトタイプとおなじ特徴を基盤に据えたものである、という点であった。デジタル社会の最先端に位置する観光形態たる宇宙観光は、もっともアナログでレトロな観光形態の持続形態でもあって、そうした特徴はすくなくとももうしばらくは変わらないであろうと考えられた。ヴァーチャルツーリズムなども含め、現代のデジタル社会における観光者の行為には、アナログ体験の固有な価値を追求する実践という特徴が顕著に見出される。宇宙観光は、デジタル化が進む社会に生きる人間が、デジタル情報技術を介して五感の刺激をもたらすアナログ的な知覚体験を追求するという逆説を体現した観光形態であり社会現象である。21世紀に新たに出現した宇宙観光は、こうしたパラドクスを内包するのである。

第Ⅳ章では、規模としては宇宙観光とは比べものにならない多数の人々を巻き込んでますます発展している、別種の現代の周縁的な楽園観光の形態を取り上げた。すなわち、ムスリムのマッカ巡礼と一体的に実践される地上の楽園観光である。現代のグローバルな世界社会における主要かつ支配的な地上の楽園観光は、ハワイ・沖縄・グアム・バリなどに代表されるような熱帯・亜熱帯の島々における癒しの観光という形態を取る。これは、西欧キリスト教世界の近代化の過程において練り上げられ世俗化されていった楽園表象に支えられ、日本など非キリスト教世界にも浸透しグローバルに展開し、今日にいたっている（吉田 2013b: 113-153）。ところで、この西欧キリスト教的世界観にもとづく楽園イメージを逆行したところにある原型的表象は、旧約聖書の「エデンの園」である。このエデンの園の楽園表象は、イスラーム世界においても受容され、西欧キリスト教的世界観とはまた若干異なるかたちの楽園表象を醸成し、これがイスラームの宗教実践と結びついて、別種の楽園観光の興隆を今日みるにいたっている。とくに、西欧に由来する世俗化された楽園表象にもとづく現代の支配的な地上の楽園観光と異なり、イスラーム世界においてグローバルに展開し発展してきた楽園観光は、おおいに宗教的な雰囲気をもっており、聖地マッカへの巡礼と密接に結びついているところに特徴がある。ムスリムが訪れるべき「地上の楽園」は、マッカに次ぐ第2の聖都マディーナにある、預言者ムハンマドの生前の住まいでもあり墓地でもある、預言者マスジド内の一画である。イスラーム世界に生きる人々を魅了し鼓舞する楽園観光は、世俗化とは別様の近代化や合理化の過程において確立され、グローバルに実行されている、もうひとつの地上の楽園観光である。

第Ⅳ章では、ひとりの日本在住インドネシア人ムスリマが2023年に実行した大巡礼（ハッジ）に関する詳細な民族誌的記述を通して、ムスリム以外にはあまり知られていない、このマッカ巡礼およびこれに付帯した半ば宗教的であるとともに半ば世俗的でもある、もうひとつのグローバルな楽園観光の特徴について明らかにした。そこでとくに注目したのは、現代のマッカ巡礼とこの楽園観光とが結合しパッケージ観光化されている実態であった。過去の時代においては到底想像もしえない規模にまで膨らんだマッカ大巡礼は、十分な管理体制によるさまざまなリスク回避策なくしては維持できないものとなっており、さらにそうした対応策がさらなるリスクの増大につながりうるという潜在的なスパイラル構造の中にある。パッケージ観光化は、そのようなリスク回避のひとつ

の要となっている。イスラームに外在的な視点から見れば、パッケージ観光化その他の諸政策は、マッカ巡礼という宗教実践に付加されたある種の世俗的合理化である、と受け止められるかもしれない。そのように理解すれば、パッケージ観光化され合理化された現代のマッカ巡礼およびこれに一体化した地上の楽園観光にはある種の逆説あるいは矛盾がある、とする解釈は成立するであろう。しかし、この「マッカ巡礼＋地上の楽園観光」の実践主体たるホストおよびゲストたるムスリムの視点においては、このような巡礼＝観光のあり方はパラドキシカルなものとみなされてはいない。ある価値観点ないし文化の枠組みからみればパラドクスであるものは、別の価値観点ないし文化の枠組みからみればパラドクスではなく、むしろ一見すると相容れない異質なものの同士の絶妙な統合体でありうる。第IV章では、この当事者たるムスリム側の認識に即して、現代のマッカ巡礼と地上の楽園観光が有するメカニズムを、対立するものの間の時間をかけた調整や媒介としての「弁証法」であると理解しようとした。

第III章と第IV章では、天空の楽園と地上の楽園という差異はあるとはいえ、いずれも一時的にその地へ旅する、現代の周縁的な楽園観光の具体例を取り上げた。これにたいし、第V章では、楽園へと移住した人々の生活つまりは「楽園暮らし」において観察される逡巡や不確定性について、東南アジア有数の楽園観光地バリ島の内陸にある周縁的な観光地ウブドの日本人を具体例に、記述した。本研究でいう移住者はかならずしも観光者と明確に区別できず、彼ら日本人移住者はアノマリー的な、つまりは周縁的な、観光主体とみなすことができた。

第V章では、ポストコロナ期の日本人移住者の生のアンビヴァレンスに着目した。この観点は、第IV章において日本在住インドネシア人ムスリム移住者の生のアンビヴァレンスに着目した観点と呼応している。ウブドの日本人移住者の中には、自らが憧れた「楽園バリ」での暮らしを十分堪能し、すでに鬼籍に入った者もいれば、配偶者や子・孫とともにバリでの暮らしを今後もつづけていくと思われる者もいる。ただ、本研究あるいはこれまでの私の研究が注目してきたのは、自らが思うような楽園暮らしをできなかった者たち——バリでの暮らしをあきらめて日本に帰った者、ふたたびバリに戻る計画をもちながらもそれを果たせず日本にとどまる者、など——であった。中長期の滞在者や移住者が次第に高齢化し、新規の若い日本人移住者が途絶えているコロナ禍以降の2020年代のウブドでは、バリに骨をうずめる——正確に言えば茶毘に付される、であるが——ことをいったん決意した移住者の中に、楽園暮らしに見切りをつけて日本に戻る生を再選択した者、身の振り方を逡巡している者、いまはその時機ではないと考えているがいずれ日本に帰る方向で心の準備を固めつつある者など、今後の生の不透明さを受け止めつつよりよい生を選択に向けて再考をする／しつづける者がいる。日本人観光者にとって、もはや楽園バリはあまり訴求力をもたなくなっているが、いまや楽園バリは、いったんバリに移住した者をつなぎとめる力も失いつつある一端がある。もっとも、それは、バリの魅力の喪失ということではなく、むしろバリで暮らしていくために必要な経済力が、かつて移住を決意したころよりも格段に上昇しているという点や、社会インフラや医療インフラが脆弱なバリよりも相対的に日本の方が魅力的に見えるようになったということから来るものではある。

こうした楽園バリでの暮らしを選んだ人々に看取される、楽園暮らしの理想と現実のギャップをめぐる静かな格闘は、カント的な意味での弁証論ないし弁証法、つまりはアンチノミーの概念に即して理解することが適切な事例である、と考えられる。端的に言って、彼らは、悩ましい現状を簡単に脱パラドクス化できない、宙ぶらりんの状況に生きている、あるいは生きようとしている。パラドクスは、いつもかならず脱パラドクス化できるわけではない。ウブドの日本人移住者の現状は、社会空間において脱パラドクス化できない、あるいはパラドキシカルなままにとどまる、まっ

とうで誠実なひとつの人の生のあり方を、われわれに教えてくれる。

以上、序章から第Ⅴ章までの議論のポイントを振り返った。本研究では、序章と第Ⅰ章における問いと主題そして議論枠組みの設定後、おもに現代の楽園観光の周縁的な諸形態に議論対象を絞りつつ、社会的事実の次元にあるさまざまなパラドクスのあり方を、ひとまとまりの民族誌的事実とともに記述し、若干の考察を行うことを通して、人類学的パラドクス論の具体を提示しようとした。誤解がないよう、最後に念のために付け加えると、これらの章の議論は、逆理、逆説、弁証法、カント的な弁証法つまりアンチノミーといった、パラドクスのタイプ分けを目的としたものではない。それぞれの民族誌的事実の固有なあり方を記述的に理解することが、本研究でいう人類学的パラドクス論の目的であり主題であった。